

## 文法・パラ言語情報・キャラクタに基づく 日本語名詞性文節の統合的な記述

定延 利之  
神戸大学

羅 米良  
大連外国語学院

### 要 旨

「自称詞『僕』は誰がしゃべることばか?」「終助詞『わ』は誰がしゃべることばか?」など、「そのことばは誰がしゃべることばか(自分はそのことばをしゃべってもよいのか、しゃべるべきなのか)?」という疑問は、日本語学習者が常に感じる切実な疑問である。だが、現在の日本語教育と日本語研究は主に2つの理由から、これらの疑問に十分答えられていない。第一に、これまでの日本語教育と日本語研究は基本的に、年齢や地域、職業といった外面的な区分にしか着目していないが、ことばと話し手の結びつきはこれらの外面的な区分に沿ってはならず、よりイメージ的な、キャラクタという区分に沿っている。第二に、日本語教育と日本語研究では伝統的に書きことばが重視され、パラ言語情報は度外視されることが多いが、実際にはことばの使い分けにはパラ言語情報も関わる。本稿は、名詞性の高い文節を対象として、狭義の文法だけでなく、パラ言語情報や、話し手のキャラクタ(人物像)をも踏まえた統合的な観点が日本語の記述において必要であることを示す。具体的には、「それをよ」を上昇調で言うのは女のキャラクタ、「それをよ」を上昇下降調で(「それをよお」のように)言うのは下品な男のキャラクタ、「それをね」と違って「それをだね」と言うのは男らしいキャラクタといった観察を展開する。

### 1. はじめに

#### 1.1 背景と目的

伝統的には「文法」は、さまざまなジャンルやスタイル、レジスターなどを通して変わらない、安定的・硬直的なものと考えられてきた。「話し

手によって文法が異なる」という考えは、Iwasaki (2005) の多重文法仮説 (Multiple Grammar Hypothesis) のようなごく一部の例外を除けば<sup>(1)</sup>、なかなか追求されることがない。そしてまた、これまでの日本語教育と日本語研究も「日本語 (共通語) は一つである」という考えに立っている。だが日本語の現実はこの考えとは必ずしも合致しない。たとえば、「動詞にコピュラは後接しない」という文法規則は、「行くです」「行くだ」を不自然とする多くの『普通人』にとっての文法規則に過ぎず、『上品な奥様』の「行くございます」、『平安貴族』の「行くでおじゃる」<sup>(2)</sup>、『幼児』の「行くでちゅ」「行くでしゅ」、『体育会系』の「行くっす」など、さまざまなキャラクタ (人物像) ごとのしゃべり方、つまり役割語 (金水 2003) に広く当てはまるものではない。

このような日本語教育や日本語研究の理念と現実との乖離は、多くの日本語学習者と日本語教師の「不幸」を現実を生んでいる。日本語学習者の「不幸」とは、たとえば若い女子学生が「明日は晴れますかな？」と『老人』のようにしゃべる、老男性教授が「ダメねえ」「暑いわあ」と『女性』のようにしゃべる、若い女子学生が同級の日本人男子学生に「ボク、ボク」と、相手を『子供』扱いしてしゃべりかけるという具合に、学習者が日本語をしゃべることで、学習者本人が思ってもみないキャラクタがもし出されてしまうというものである。

日本語教師の「不幸」というのも学習者の「不幸」と根は同じもので、「先生、終助詞の『わ』は誰が使いますか？」「終助詞の『よ』は誰が使いますか？」「自称詞『わたし』は誰が使いますか？」「感動詞『おや』は誰が使いますか？」「接続詞『でも』は誰が使いますか？」といった、学習者がごく自然に感じる「そのことばは誰のことばか？」という無数の問題に対して、年齢や地域、職業などの情報で近似値的な解答はできても、完全な解答を返すことができない、というものである。これまでの日本語研究は基本的に、年齢や地域、職業といった外面的な区分にしか着目して

おらず、したがってその成果を取り込む日本語教育も外面的な区分に着目した解答は与え得るが、ことばと発し手の結びつきはこれらの外面的な区分に沿ってはおらず、よりイメージ的な区分に沿っているので、その解答は完全なものとは言えない。

これとは逆に、日本語母語話者とほとんど変わらない自然な日本語を身につけた、日本語学習の成功者たちの「幸」は、たとえば、いかにも『インテリ』の学習者が「日本語一の、こー、アクセントーというのは」などと『インテリ』らしく考え考え言いよどんでしゃべるといったように、現実の日本語（共通語）の多様性にいち早く気づき、それを利用することに基づいているように見える。つまり、「自分は日本語社会に基本的にどのようなキャラクタとして参入したいのか」を自覚し、当該のキャラクタの役割語を集中的に学習することで、大きな効果を挙げているようである。いま例示した『インテリ』の学習者（実は大学教員である）が自国の大学に日本の大学生を引率してそこで学生たちと共に何週間かを過ごし、少し親しくなったからといってしゃべり方を改め、『友達』風にしゃべってみると、とたんに学生たちから「先生、日本語がヘタになりましたね」と言われた、という事例は、この成功者が『インテリ』という特定のキャラクタに重点を置いて集中的に学習してきたということを物語っているのではないか。

このような日本語学習者と日本語教師の「不幸」を軽減し、「幸」を増大させていくには、「日本語（共通語）は一つでない」という認識に立って、さまざまな日本語<sup>(3)</sup>を記述・教育することが必要だろう。本稿はこのことが（少なくとも記述については）実際に可能であることを具体的に示そうとするものである。

## 1.2 必要となる概念

上記の目的を達成しようとする上で重要な概念をここで2つ導入しておく。

一つは、すでに上にも登場した「キャラクタ（人物像）」である。この概念について金水（2003: 205）では、次の（1）のように述べられている。

- （1）ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

本稿で「キャラクタ」（適宜略して「キャラ」）と言うのは、（1）の「人物像」を呼び換えたものである。この呼び換えは一つには、次のマンガ学習参考書の例（2）のように、

- （2）ネコ：バラバラにすれば部首が見つかるニャン  
イヌ：バラバラにしてどうするワン  
[まんが塾太郎（著）・小田悦望（画）『マンガだけど本格派 漢字のおぼえ方 漢和字典 [部首] 攻略法』（太陽出版、1997）p.15]

ネコが「見つかるニャン」、イヌが「どうするワン」というような、マンガ世界内とはいえ「人物」とは必ずしも呼びやしくない存在の発話を考慮したせいでもある。

だが、「人物像」を「キャラクタ」と呼び換えることの、もっと大きな動機は、ことばと人物像の結びつき方が多様で、（1）のような「ことばが話し手の人物像を示す」という形だけでなく、他の形でも結びつくということに関係している。たとえば「ニタリとほくそ笑む」ということばがただの微笑ではなく『悪者』の微笑だけを表すように、ことばと人物像は「ことばが動作を表す際に、その動作の行い手のキャラクタまで示す」と

いう形でも結びつくことがある。「キャラクタ」という用語を導入するのは、このように多様なことばと人物像の結びつき方の全体をとらえ、なおかつ個々を区別するためであり、(1)のようなキャラクタは「発話キャラクタ」、他方、「ニタリとほくそ笑む」ということばと結びついている『悪者』のようなキャラクタは「表現キャラクタ」と、区別されている。キャラクタについての詳細は定延 (2005; 2006b; 2008-2010; 2011)、定延・中川編 (2007) を参照されたい。本稿は専ら発話キャラクタを考察するものであり、以下で「キャラクタ」と言うのは全て発話キャラクタを指す。

ここで導入したい重要な概念の第2はパラ言語情報、つまり、話し手がどのようにしゃべるかについての情報である。これまでの文法記述は「ふう」のしゃべり方に依存している部分がある。たとえば次の(3)を見られたい。

- (3) a. お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがあるよ。
- b. \*お腹が空いているなら、冷蔵庫にプリンがある。

末尾に「よ」の付いている(3a)は自然だが、「よ」のない(3b)は不自然、という文法記述がある(三宅 2010)。ところが、たとえば(3b)後半部「冷蔵庫にプリンがある」を、さも重大な秘密を吐露するように、口に手を当てヒソヒソとささやくなれば、(3b)も自然さが増すという話者は少なくない。もっとも、だからといって、この文法記述が間違いで意味がないということにはならない。しゃべり方次第の部分がある、と認めながら文法記述が展開されていることもあるぐらいである(井上 1997)。しゃべり方を変えることで初めて記述が妥当でなくなるなら、それは逆に、その記述が有意味で、文法の或る部分を正しく捉えているしるしと言える。その上での話だが、ヒソヒソささやくしゃべり方がなぜ例外的に自然

さを高めるのかと考えてみることは、「ふつう」にしゃべることの意味を明らかにし、文法記述をさらに深めてくれるだろう。

### 1.3 考察対象

本稿の考察対象は文節であるが、「行きますよ。」のような、典型的な語順において文末に現れる文節は除き、「私がね」「それについてはさ」のような非文末の文節に限る。（その理由は第4節で述べる。）

次の(4)の下線部に当てはまる語句としては、たとえば「あれ」の他に、

(4) まず、\_\_\_\_\_、それから、これを運んで。

「あれと」「あれだ」「あれね」「あれとだ」「あれとね」「あれとだね」などが考えられるように、非文末の文節は「名詞相当句（+助詞）（+コピュラ）（+間投助詞）」という構造を持つ。ここでは、他の要素と異なり名詞相当句（いまの例なら「あれ」）だけは必須の要素とされる。このことから、本稿ではこれを「名詞性文節」と仮称する。それぞれの名詞性文節がどのような話し手によって発せられるかはこれまで明らかにされていない。

本稿は、狭義の文法の他に「キャラクタ」「パラ言語情報」という2つの考えを取り入れることによって、「多様な日本語」（具体的には、第1.1節末尾で先述した、「男ことば」や「格の高い者のことば」、さらにマンガの登場人物のことばなど）の記述が可能になるということを名詞性文節について具体的に示そうとするものである。次の第2節では名詞性文節におけるコピュラについて、続く第3節では名詞性文節における間投助詞について観察する。最後の第4節では観察結果をまとめる。

## 2. 名詞性文節におけるコピュラ

日本語の名詞性文節末が文末と似た性質を備えていることは、伝統的な記述の立場においても（たとえば田中 1973）、会話の中の文法を追求する立場（Iwasaki 1993）においても認められているところである。名詞性文節末に、文末のコピュラ（いわゆる「be 動詞」のようなもの）の多くが生起することは、まさに名詞性文節末と文末の類似性を示すものと言え、このコピュラだけで話し手のキャラクタを特定できることがかなりある。

より具体的に言えば、文節内に現れるコピュラには、「だ」「です」「じゃ」「でしゅ／でちゅ」「でござる」「でおじゃる」「ざんす」がある。（但し、「っす」「でつ」などが名詞性文節内に現れるかどうかは不明である。）これらは文節内では全て低く発音される。「だ」「です」以外のコピュラは、話し手のキャラクタを決める。すなわち、「じゃ」は『老人』、「でしゅ／でちゅ」は『幼児』、「でござる」は『侍』、「でおじゃる」は『平安貴族』あるいは『おじゃる丸』、「ざんす」は『上流夫人』あるいは『イヤミ』である。以下、順に見ていく。

「じゃ」を発するのは『老人』キャラである。実例として (5) (6) (7) を示す<sup>(4)</sup>。（該当部分に下線を引いておく。以下も同様。）

(5) 「ふお、ふお、ふお。そこでじゃ。もう一度着られるように、お主にいい物をあげよう」

老人が取り出したのは、銀色に光る指輪だった。

[『ぴったりリング』

<http://jbbs.livedoor.jp/bbs/read.cgi/otaku/7972/1169350887/150>]

(6) 情けない話じゃ。しかしじゃな。墓を守ることがワシにとって生きることでもあるんじゃ。

[『墓守の唄』 <http://www2.odn.ne.jp/~cdj80950/hakamori/index.html>]

(7) マオリ老人は、自信たっぷりに言った。

「それが、じゃな。なんと、この近くに沈んだるんじゃよ。これとそっくりなのが！」 [『海神伝説 1』

<http://www.eonet.ne.jp/~laboratoire-ia/neptunia/nep%202.html>]

以上の例は、当該の文節末に読点「、」ではなく句点「。」が記されているが、文意から判断してこれらも文末ではなく名詞性文節と考えておく。また、(5) (7) の話し手が「老人」と明記されているのに対して、(6) の話し手はそのような明記がされていないが、ここで問題にしているのは話し手のキャラクタであって世代ではないので、イメージを重視して『老人』キャラのことだと判断した。

「でしゅ／でちゅ」を発するのは『幼児』キャラである。実例 (8) (9) (10) を見られたい。

(8) マロ伊藤は水産学者と呼ばれるだけあって冷静に答えた。

「あのでしゅね。ウミケムシを食べると言うムチャクチャな・・・いや、難解なテーマでしゅと、結局誰も食べれなかったという結末がおよそ87%の確率で考えられましゅ。しかるに私と致しましてはせめて総隊長のツラ、いや顔を汚さぬよう、私が研究室で食べた事もあるアメフラシをぜひ賞味頂きたいと考えたのでしゅが・・・」 [『グルメ探検隊「やっちゃまった！ウミケムシをついに喰らう！」』

<http://www.sasame.co.jp/bouz-2/gurume001.html>]

(9) まるるん。しゃん～♪ 僕しゃんのおうちにはでしゅね～♪ マウス  
パットがあるにゃ～♪ そのほかいろいろでしゅ～♪/

[『おこしゃまと仙猫『お絵か記』』

<http://www.himajin.net/diary/p689.html>]

(10) それででちゅね、もうすぐレースアップシリーズ SoldOut になって  
しまいそうでちゅ [『キャバリア♡ふりるのわらびもち(→☺←)』

<http://ribonangel.blog91.fc2.com/blog-entry-71.html>]

これらのうち (8) は先の (5) (6) (7) と同様、文節末に句点「。」が現れているが、これらも文意から名詞性文節と判断した。音符の現れて



いる (9) も同様である。特に (8) では、水産学者という話し手の職業が明記されているが、イメージからすれば『幼児』キャラであると判断した。

「でござる」を発するのは『侍』キャラである。次の (11) (12) (13) を参照。

- (11) 自分で意識していない無意識の状態でも売買は早くなる傾向があるのでござるよ。それなのにでござるよ。 「はやき事 風の如くだ！このチャンスに買え！」などという事を、普段の自分の投資の教訓に加えたらどうなるでござるかのお。

[『FX ブログ 相場生活入門』 <http://fxblog.izyuu.com/?eid=675260#>]

- (12) 「いたたた、痛いのでござるよ薫殿。つまりでござるなあ、重要なのは散歩ではなくて」

[『SAMURAI X』  
<http://12hp.jp/book.cgi?id=walkin&ak=&pn=4&mode=log&kt=1&data=20090908013004&pg=>]

- (13) 拙者今までに二人のそれがしと同じ誕生日の人間と出会ったことのある不肖侍長岡でござる。しかも一人は生徒。そんでもってもう一人は西暦も一緒。通称「カーくん」(かなりお姉系)大学時代の同年生でござった。つまりでござるよ生徒とは西暦も違うし性別も違うのでそうそう整合性はないとしてもカーくんとは占い系は全て同じってことになるでござるよね？

[『不肖侍ナガオカの「ひとりごとじゃすまされんぜよ！」』  
<http://samurai.naganoblog.jp/e423295.html>]

ここでは「それなのに」「つまり」といった接続詞に「でござる」が後接しているが、これらも、「名詞性文節」の構造「名詞相当句 (+助詞) (+コピュラ) (+間投助詞)」における「名詞相当句 (+助詞)」に近いものとして含めておく。

「でおじゃる」を発するのは『平安貴族』キャラ、あるいはそれをモデルにした、アニメ『おじゃる丸』の主人公・おじゃる丸のキャラクタである。事例 (14) (15) (16) を見られたい。

- (14) 「我等はガイアークなり」「オルグではないぞよ」「しかしでおじゃる」  
ガイアークの三人はガオレンジャーから見て左手に、オルグ達から見て右手にいた。また彼等の戦闘員達を大勢引き連れている。  
「この者達には助太刀するなり」「生き返らせてもらった恩もあるぞよ」「義理はちゃんと返すでおじゃる」  
こう言って三人はそのままガオレンジャー達に向かおうとする。  
[『スーパー戦隊総決算 第四話 また巡り合いその八』  
<http://ncode.syosetu.com/n06281/48/>]
- (15) 「さてさてでおじゃる。未来の魔女アルティミシアを倒すには未来にいるアルティミシアの身体を倒さないとダメって事でおじゃるな。だから、未来に行かないと何も出来ないという事でおじゃるよ」  
[『第八十九話 オダイン博士の作戦』 [http://www4.plala.or.jp/rei-kamizuki/FF8/FF8\\_89.htm](http://www4.plala.or.jp/rei-kamizuki/FF8/FF8_89.htm)]
- (16) それで、でおじゃる。「魂」を集める方法が、実はひとつあるらしい。  
[『やる夫のソウルハッカーズ第21話』 348 名前：◆  
AdVoHBYtEQ[]  
投稿日：2010/07/30(金) 22:13:33 ID:aAYnniXY,  
[http://www.yaruyomi.com/thread/soulhackers\\_21.html](http://www.yaruyomi.com/thread/soulhackers_21.html)]
- これらも表記としては文末のようになっているが、文意から文節末と判断した。
- 「ざんす」と言う話し手は『上流夫人』（あるいはそこから派生した、アニメ『おそ松くん』の登場人物『イヤミ』）のキャラクターである。実例として (17) を挙げる。
- (17) えーー まず ボールに 卵1個をときほぐします。そこに、ホットケーキミックスを 大匙2杯程度 混ぜ込みまして シャバシャバって 感じの 種を作ります。 それをざんすねー フライパンに薄〜〜〜く 広げて焼く。  
[『LIFE 'O' THE PARTY』  
[http://kazu.mo-blog.jp/prince/2010/06/post\\_c9fe.html](http://kazu.mo-blog.jp/prince/2010/06/post_c9fe.html)]

『老人』の「じゃ」、『幼児』の「でしゅ／でちゅ」、『侍』の「でござる」、『平安貴族』あるいは『おじゃる丸』の「でおじゃる」、『上流夫人』あるいは『イヤミ』の「ざんす」は、接続詞のように、どちらかといえば実質的意味の乏しい語句に後接しやすいという感触が得られている。上例で言えば (5) 「そこでじゃ」、(6) 「しかしじゃな」、(7) 「それが、じゃな」、(8) 「あのでしゅね」、(10) 「それででちゅね」、(11) 「それなのにでござるよ」、(12) 「つまりでござるなあ」、(13) 「つまりでござるよ」、(14) 「しかしでおじゃる」、(15) 「さてさてでおじゃる」、(16) 「それで、でおじゃる」、(17) 「それをざんすねー」の下線部は実質的意味が乏しく、これから外れるものは (9) 「僕しゅんのおうちにはでしゅね」ぐらいである。さらに調査を続けて結論を得たい。

先述のように、コピュラ「だ」は、話し手のキャラクタを決めるわけではない。だが、直後に間投助詞が続かない場合は、話し手のキャラクタが決まる。「だ」（間投助詞無し）の話し手は『年輩の格上の男』である。これはインターネットの文章ではなくても、伝統的な小説にもよく見られる。実例として (18) (19) (20) を挙げる。

- (18) 「そういう無頼漢を、だ  
と、継之助はいった。  
「長州と薩摩があと押しした。この両藩はなんであるか」  
[司馬遼太郎 1968『峠』 (下) ]
- (19) 吉里吉里人は吉里吉里語によって立たなければならない、政治家が「ワシハ、ダ」「ソレハ、ダ……」などの政談方言で立っているように。  
[井上ひさし 1981『吉里吉里人』 (上) ]
- (20) しかしだね、僕にこれをサントリイウイスキイだと言って百五十円でゆずってくれた人は、だ、いいかね、そのひとは、…  
[太宰治 1948『春の枯葉』]

これらのうち、(19)では話し手が「政治家」と特定されているが、少なくとも(20)の話し手が(『春の枯葉』の内容から判断すれば)太宰治に近い人物であって、政治家ではないように、この「だ」は職業的なことば遣いというわけではなく、キャラクタによるものである。

### 3. 名詞性文節内の間投助詞

以上の第2節で見たコピュラの場合と同様、名詞性文節末に間投助詞が生起することも名詞性文節末と文末の類似性の現れと言える。パラ言語情報に着目しても、ポンと跳ぶように高くする韻律(筆者らの用語では「末尾上げ」。定延(2006a)参照)が名詞性文節末にも文末にも現れることは、やはり両者の類似性を示していると考えられる。日常の生きた方言に関する研究の中には、文末に現れる終助詞と名詞性文節末に現れる間投助詞の区別を廃し両者を一つと見る立場もあるほどである(藤原1994)。但し、文末と名詞性文節末の両方に現れるのは「の(う)」「にゃ」「さ(あ)」「な」「ね」「よ(お)」ぐらいで、「わ」「ぞ」「ぜ」は文末にしか現れない。筆者らもこの立場に賛同するわけではないので(詳細は定延(2005)を参照)、本稿では間投助詞と終助詞を区別している。

コピュラだけでは決まりきらなかった話し手のキャラクタは、間投助詞に着目することで絞り込まれてくる。間投助詞には、「の(う)」「にゃ(あ)」「さ(あ)」「な(あ)」「ね(え)」「よ(う)」があり、「の(う)」「にゃ」はそれだけで話し手のキャラクタを決める。以下、順に見ていく。

まず、「の(う)」は、先行するコピュラは「じゃ」の他「です」ぐらいで、話し手はコピュラの有無に関わりなく『老人』キャラである。实例を(21)～(24)に挙げる。

- (21) 「さあてのう、どこに眠ってござるか、うららはいっせつ(まったく)知らんがのう」 [水上勉1979『金閣炎上』]

- (22) 「性格もの、あんげな事件を起したで、ごつい男やと人はいうようになつたが、てんで顔つきとちごうてやさしい男（ひと）での…」  
[水上勉 1979 『金閣炎上』]
- (23) 「その仮想敵国とアメリカ、この二大軍事的超大国はの、軍備に対する年期の入れ方がちがうんじや。」  
[井上ひさし 1981 『吉里吉里人』 (中) ]
- (24) 「数ヶ月前 わしがまだ立って動くことができてた頃 ローマの街でたまたまそなたが設計したという浴場を訪れての… 雄大で美しい景観の壁画を眺めながら湯に浸るといふ斬新な発想には深く感心した」  
[ヤマザキマリ 2009 『テルマエ・ロマエ』]

次に、「にゃ（あ）」は「です」にしか後続せず、話し手はコンピュータの有無に関わりなく『ネコ』である。これはネコの鳴き声（「にゃー」）と通じ、また、音声的に類似している間投助詞「な」をもとにしたものだろうが、結果としては、動物の中で間投助詞を持つのは『ネコ』に限られている。実例（25）を参照されたい。

- (25) 「これをですニャ・・・」 「こうして・・・」 「こうして こうして・・・」 「・・・入れましたニャ。」  
[『海松色☆茶色』  
<http://blog.goo.ne.jp/komadori068/e/a668cf8cd48bc2a618d465e813f6c711>]

「さ（あ）」はコンピュータとは共起せず、話し手は『若者』である。実例として（26）（27）、そして異質な例として（28）を見られたい。

- (26) 「マリーツ ちょっとお願いがあるんだけどさーツ」  
[ヤマザキマリ 2010 『イタリア家族 風林火山』]
- (27) 「確かに世界中どこへいってもイタリア料理ってあるけどさー」  
「でもサ」 [ヤマザキマリ 2010 『イタリア家族 風林火山』]

- (28) 「時ちゃん、何度も覗（のぞ）いてみなくたって、この雨に帰れないことはさ、よく分かったよだ。早く二十六番へ、蠟燭を持って行きな」  
[川端康成 1927『温泉宿』]

すでに述べたことと重なるが、(26) (27) の話し手の年代は若者ではないが、ここではイメージとしては『若者』と判断していることに注意されたい。見るからに年老いた話し手のことばとしては、「さ(あ)」は似つかわしくないだろう。最後の(28)は話し手の(年代だけでなく)イメージが『若者』らしくないが、直後の文節に「よだ」とあるように、これは共通語らしさが怪しまれる例として除外しておく。

「な(あ)」としゃべるのは『男』の傾向があり、これは特にコンピュータと共に現れるとはっきりする。例を(29) (30) (31)に挙げる。

- (29) 「とにかく、新聞記者としてだな、その職業的リアリズムの面目にかけても、妖怪変化の仕業とは思いたくないのだが…」  
[司馬遼太郎 1954『石楠花妖話』]

- (30) 「お前の境涯ではだな」  
と、佐吉少年にいった。  
「人間はまだわからぬ。だいたい話をしてやっど相手の人物の程度がわかるようでは、世に処することができぬ」  
[司馬遼太郎 1968『峠』(上)]

- (31) 「出るには出たがね、てんでだらしがねえのさ。オレが帰ったあとでみんな逃げてしまったらしい。みんな逃げ腰なんだからな。然しだな。あれだけ集まって来たことはだな。いいことだと思うんだ……」  
[島尾敏雄 1952『兆』]

これらの例ではいずれも間投助詞「な」がコンピュータ「だ」と共に現れており、話し手は『男』である。

間投助詞「ね」の場合も、コンピュータ「だ」と共にしゃべるのは『男』だが(实例(32))、「です+ね」は『大人』(实例(33)(34))、「ゼ

ロ+ね」は『女』『若者』か（实例（35））、『年輩の格上の男』（实例（36））である。

(32) しかしだね、僕にこれをサントリイウイスキイだと言って百五十円でゆずってくれた人は、だ、いいかね、そのひとは、...  
[太宰治 1948『春の枯葉』]

(33) 「要するにですね、つまり、一滞納した税金ですよ」「それはですね、つまりこうして、一」 [山本周五郎 1948『忍術千一夜』]

(34) 「要するにですね、私の小説、いや歴史、つまり記述としての歴史はですね、...」  
[島尾敏雄 1952『兆』]

(35) 「アップはね、髪の毛の少いひとがするといいのよ。...」  
[太宰治 1947『斜陽』]

(36) 「いやねえ、君ねえ、あれは明らかに大錦の勝ちですよ」  
[北杜夫 1964『楡家の人びと』（上）]

間投助詞「よ」は、コピュラ「だ」と共起すれば『格上の男』、「です」と共起すれば『大人』である。「ゼロ+よ」としゃべるのは、「よ」が上昇調であれば『女』であり、「よ」が上昇下降調（定延（2006a）の「戻し付きの末尾上げ」）であれば『下品な男』である。次の（37）は前半は「ね」の例で、後半が「よ」の例である。最後の（38）は、文意や「ぜ」の存在から、「よ」は上昇下降調のみで発せられる。

(37) 「人々の人民がですね、要するにですよ、...」  
[島尾敏雄 1952『兆』]

(38) 「あー そうだ！ これからひとつ風呂浴びに行つてよ スカ〜ッとしようぜ な!？」  
[ヤマザキマリ 2009『テルマエ・ロマエ』]

間投助詞の上昇下降調は『男』『女』ともに見られるが、間投助詞「よ」の上昇下降調がまったく『女』らしくないことは、「よ」の意味や上昇下降調の意味から自動的に予測できることではなく、学習者には格別の注意が必要だろう。

#### 4. まとめ

非文末の文節は「名詞相当句（＋助詞）（＋コピュラ）（＋間投助詞）」という構造を持っている。このうち、たとえば「私が」「それについては」のような、コピュラも間投助詞も現れない場合については、上述のような形で話し手を具体化させることはできないが、これらは、たとえば自称詞「私」や複合格助詞「について」を発するのは『子供』ではないというように、名詞相当句や助詞から話し手を絞り込むことができる。これらもまた、役割語である。日本語においては役割語は一部の特殊なことばというわけではない（定延 2008-1010; 2011）。

文節内に現れるコピュラには、「だ」「です」「じゃ」「でしゅ／でちゅ」「でござる」「でおじゃる」「ざんす」があり、これらは文節内では全て低く発音される。「だ」「です」以外のコピュラは、話し手のキャラクタを決める。すなわち、「じゃ」は『老人』、「でしゅ／でちゅ」は『幼児』、「でござる」は『侍』、「でおじゃる」は『平安貴族』あるいは『おじゃる丸』、「ざんす」は『上流夫人』あるいは『イヤミ』である。「だ」「です」の話し手のキャラクタは、これらに後続する間投助詞やイントネーションによって決まる。

間投助詞には、「の（う）」「にゃ（あ）」「さ（あ）」「な（あ）」「ね（え）」「よ（う）」がある。「の（う）」「にゃ（あ）」はそれだけで話し手のキャラクタを決める。「の（う）」は、先行するコピュラは「じゃ」の他「です」ぐらいで、話し手はコピュラの有無に関わりなく『老人』である。「にゃ（あ）」は「です」にしか後続せず、話し手はコ



ピュラの有無に関わりなく『ネコ』である。「さ（あ）」はコンピュータとは共起せず、話し手は『若者』である。

「な（あ）」としゃべるのは『男』の傾向があり、これは特にコンピュータと共に現れるとはっきりする。「ね（え）」の場合、「だ」と共にしゃべるのは『男』だが、「です」と一緒なら『大人』、「ゼロ+ね」は『女』『若者』か『年輩の格上の男』である。「よ（う）」は、「だ」と共起すれば『格上の男』、「です」と共起すれば『大人』である。「ゼロ+よ（う）」としゃべるのは、「よ（う）」が上昇調なら『女』であり、「よ（う）」が上昇下降調なら『下品な男』である。

以上、本稿では、名詞性の高い文節を取り上げ、さまざまな名詞性文節がそれぞれどのような話し手のことばであるかの考察を通して、狭義の文法だけでなく、パラ言語情報や、話し手のキャラクタ（人物像）をも踏まえた記述が日本語の記述において必要であり、また可能であることを示した。

本稿では、日本語の名詞性文節末と文末文節が「似た」性質を備えていると述べた。「似た」性質、ということは当然ながら、両者は別物で、違いもあるということである。たとえば文節末の間投助詞と文末の終助詞が完全には一致せず、文節末のコンピュータと違って文末のコンピュータは低音調とは限らないように、実際に両者は違っており、同じものではない。だからこそ、本稿では考察対象を名詞性文節に限定した次第である。今後は、名詞性文節だけでなく、文末文節についても、さらに他の発話成分についてもパラ言語情報とキャラクタ概念の導入により、記述を進めたい。「あら」「おや」と下降調で驚くのは『上品』な『女』に偏るといった、感動詞についての記述はその一例である。詳細は定延（2011）を参照されたい。

## 注

- \* 本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究（A）「人物像に応じた音声文法」（課題番号：19202013, 研究代表者：定延利之）、基盤研究（B）「役割語の総合的研究」（課題番号：23320087, 研究代表者：金水敏）の成果の一部であり、CAJLE 2010 での口頭発表「文法・韻律・キャラクタに基づく日本語名詞性文節の統合的な記述と教育」（2010年8月14日）の内容に加筆・修正を施したものである。
1. Iwasaki (2005) の多重文法仮説によれば、文法は環境に応じて、その下位システムのうち一部だけを活性化させる。この活性化のパターンは小文法（component grammar）と呼ばれる。たとえば「一塁におくる。俊足赤星 一塁セーフ。ここで赤星の足」のような、一般の人々が言いそうもないスポーツアナの発言を生み出す『スポーツアナ文法』は、小文法の一つである。
  2. ここで「『平安貴族』の「行くでおじゃる」と記述しているものが、あくまで現代日本語のことばだということには注意が必要である。実際には「おじゃる」ということばを発していたのは平安貴族ではなく、室町から江戸時代にかけての京都の庶民であり（金水 2003）、たとえばインターネット上に現れる『平安貴族』の「おじゃる」は、あくまで現代日本語の問題としてとらえなければならない。
  3. 具体的には、従来からよく言われていたものとしては「男ことば」「女ことば」「老人語」「若者語」「幼児語」。それに新たに付け加えて「格の高い／低い者のことば」「品の良い／悪い者のことば」。さらに、日本のマンガに親しみたいなど、学習者のニーズに合わせて「平安貴族のことば」「侍のことば」など増大していくので網羅的な枚挙はできない。
  4. 本稿では、インターネット上の実例には URL を付す。データがインターネット上にあることの最終確認日はいずれも 2010年8月9日である。

## 参考文献

- 井上優（1997）「「もしもし、切符を落とされましたよ—終助詞「よ」を使うことの意味—」『言語』26-2, 62-67 大修館書店
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 定延利之（2005）『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化—』岩波書店
- 定延利之（2006a）「文節と文のあいだ—末尾上げをめぐる—」音声文法研究会（編）『文法と音声5』107-133 くろしお出版
- 定延利之（2006b）「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6, 117-129 岩波書店

- 定延利之 (2008-2010) 「日本語社会 のぞきキャラくり」三省堂ワードワ  
イズ・ウェブ <http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu/>
- 定延利之 (2011) 『日本語社会 のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき  
・ことばつき—』三省堂. (定延 2008-2010 を改訂したもの)
- 定延利之・中川正之 (編) (2007) 『音声コミュニケーションの対照』く  
ろしお出版
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」鈴木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別  
日本文法講座 9 助詞』209-247 明治書院
- 藤原与一 (1994) 『文法学』武蔵野書院
- 三宅知宏 (2010) 「日本語の疑似条件文と終助詞」『日本語文法学会第  
11 回大会発表予稿集』
- Iwasaki, Shoichi. (1993). The structure of the intonation unit in Japanese. In S.  
Choi (Ed.), *Japanese/Korean Linguistics 3*, 39-51.
- Iwasaki, Shoichi. (2005). Multiple-grammar hypothesis: a case study of Japanese  
passive constructions. *Phylogeny and Ontogeny of Written Language*, Kyoto  
University, August 17, 2005.